

# まんだら通信

平成19年(2007)12月 佛誕2573年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>  
E-mail [ryusho@awa.or.jp](mailto:ryusho@awa.or.jp)

## ブッダ最後の旅に行く

二千五百年前のインドは、心も経済も世界に類を見ない豊かな国でした。ヴェーダの聖典に基づくバラモンの教えの他に、『六師外道』といわれるような沢山の宗教家が現れて、自分の考えを説きました。

ヴェーダの教えは今、ヒンズー教として大方のインド人の心の支えになっており、到るところでその信仰の証しを見ることが出来ますが、国の外にまで出ることはありません。その中で、一つだけ世界に広まった教えがあります。

「人は、行いによって卑しい人となり、行いによって高貴な人になるのです。人は生まれながらにして苦(何事も思い通りにならない)の世界にいます。しっかりとこれを認めることが、何よりも大事なのです。」と仰ったブッダ、釈尊の仏教ですね。

ご存知のように、日本には酷寒のヒマラヤを越え灼熱の砂漠のオアシス国家を越えて、中国・朝鮮経由でた



お悟りを開いたことを記念して建てられた大塔。52メートル。裏にゆかりの菩提樹があり、坐禅をされた金剛宝座(こんごうほうざ)があります。



ケーサリヤのストゥパ跡

どり着きました。それから千五百年、この国の人々の心の糧となつて今に伝えられています。

現在ネパール領になっている、カピラバストゥという小国の王子(ゴータマ・シッダールタというお名前でした)が、約束された王位も家族も一切を捨てて修行の旅に出ます。

考えられるあらゆる苦行を続けた末、苦行では悟りを開くことが出来ないと悟り、ナイランジャナー河で沐浴し、村の娘スジャータさんが供養してくれた乳粥で元氣を取り戻し、近くの菩提樹の根元で禅定に入ります。

お経には、その時のご決意を、「われ正覚を得ずんば座を立たじ。」と記されており、矢張り文語調の方が力強い感じが伝わりますね。

やがて、明けの明星が輝く朝まだき、遂に総ての疑念が晴れお悟りを開きます。その日は今日、十二月八日であったと伝えられています。

その後、当時の修行者がそうであったように、二期の三ヶ月間、精舎にとどまって修行をする雨安居以外の四十五年間、村外の祠やお堂、或いは樹の下で雨露を凌ぎ、日々の乞食でお命を支えながら、国王・大臣・長者・有名無名の遊女や『犬殺しのマータンガ』といわれる、人として扱われることのない人たちなど、ありとあらゆる人々に、相手に応わしいとえ話で法を説き続けたのでした。

キサー・ゴータミーといううら若いお嫁さんがいました。よちよち歩き、可愛い盛りの我が子を亡くしました。何とかして生き返らしたい一心で、その赤子を抱いて、町中のお医者さんや薬屋さんを駆けずり回りました。

最後に訪ねたお医者さんが「丁度町外れのジェータの林に世尊が滞在しておられるから、あの方に聞けばいいでしょう。」と教えてくれました。

彼女の話を聞きになったお釈迦様は優しくおっしゃいました。「もう大丈夫だ

◆光陰矢の如しとか。残すところ、今年も20日余りになりました。

あなたにとって、今年はどうな年でしたか。幸せだったよという人、思い通りじゃなかったという人も、見守っていただいた今年の感謝と、来年への願いを込めて除夜の鐘を搗きにおいで下さい。そして、元朝護摩のお礼も用意致しますので、どうぞお申し込み下さい。◆高山為蔵さんから引き継いだ民生委員を、11月30日付けで退任しました。9期27年間だったそうです。

月並みの感想のようですが、この間、公私に亘り、沢山の皆様のご厄介になりました。殊に担当地区本郷区の皆様には、至らぬ私を暖かく見守って戴きました。心からお礼を申し上げます。

後任は、計らずも長女鈴木龍芳(りゅうほう)が引き継ぐこととなりました。何卒、宜しく申し上げます。◆先月、137号の航空写真は館山市の中村正次さんが、お得意のモーター・パラグライダーで写したものです。うっかり説明を忘れてましたが、遠く故郷を離れてお住まいの皆様には懐かしいのではないかと。海岸道路の向うに野島崎と灯台が小さく見えています。◆ご覧のように、今月号は奮発して両面になりました。旅行社の言葉『渾沌の大地』そのままに、何でもありのお国です。「インド病」という言葉があるように、病みつきなると忘れられない不思議な魅力があるお国です

沢山写してきた写真は、時間(と、お小遣い)があれば本堂でも皆さんにご覧戴きたいと思っています。◆尊敬する、スリランカのアンギラサ師のお寺の落慶式に、本当は駆けつけたかったのですが、不本意ながら出来ませんでした。今から心がけて、来年は是非伺いたいと思っています。◆今月の野草は、スイセン【ひがばな科スイセン属】です。初冬、土手などに咲き始めるこの野草は、何といっても季節の花ではないでしょうか。地中海沿岸からシルクロードをはるばると越え、古代、海を越えて渡来したものだそうです。◆皆様、どうぞよいお年を。

2007/12/09



## 余滴

よゴータミー。今まで死者を出したことの無い家から、ケシの種を貰ってきなさい。それさえあれば、生き返りの薬を調べることができるから。」と。

家々を訪ね歩くうちに、人は必ず死ぬものであるということを知り、我が家に帰りお葬式を済ませてから、お釈迦さまに申し上げました。

「世尊よ、有り難うございます。もうケシの種は要らなくなりました。不死への道を探したいと思えますので、私を弟子にして下さい。」とお願ひしてやがて悟りを開き、長老尼と尊称されるようになりました。

「人が死ぬなんて、分かりきったことではないか。」とお思いでしょうか。でも、愛する人と別れて嘆き悲しむ人は跡を絶ちませんし、人に話したことはありませんが、私自身、二十年前に二十歳で事故死した娘のことを想わない日はありません。

八十歳になられた頃、「アーナンダよ。私は年老いた。丁度壊れかけた車が、革ひもで繕って漸く動いているように。」とつぶやくことが多くなりました。お釈迦様の最後の遊行の様子を綴った『マハー・



涅槃堂全景 お堂の前にゆかりのサーラの木があります



涅槃堂内部の涅槃像にお経を上げるタイの巡拝団

パリニツバーナ・スッタタ（大般涅槃經）というパリ語のお経があります。このお経に記された遊行の出発地ラジギルから、お涅槃のクシナガールに到る道を通り、お釈迦さまのお心に触れたいと、東京の旅行社プランニング・ワールドさんをお願いして、コース作りをして戴きました。

期間は十一月二十一日から二十九日まで九日間、同行七人で体調を崩す人もなく元気で行って参りました。撮った写真は二八〇コマ。

ですから、掲載の写真はほんの一部です。

八年ぶり五回目のインドは、中国と並んで経済成長ナンバーワンの言葉通り、首都のニューデリーや主な道路は車がいっぱいで渋滞の連続でしたが、お釈迦さまゆかりの地方は田畑の佇まいや道行く牛やヤギ、人々の様子などこれを見ても、ことに朝霧の田舎道など、アーナンダ尊者をお連れになったブツダが、今にも現れそうなの、そんな気配でした。

二〇年ほど前までは、ホテルや佛蹟でお会いするのはみんな日本の団体でしたが、今回は日本の巡礼団には会いませんでした。

そのかわり、韓国・台湾・タイ・スリランカや

インド南部の州の仏教徒（ネオ・ブディストと呼ばれ、元は最下層のカーストの人達だそうですが）がいっぱいで、それぞれの国の力がついてきたことが良く分かりました。そして、皆さんとても熱心に長い時間お祈りを捧げていました。

この時期のインドは渇水期で、どの川も水が少なく濁っていますが、最後に沐浴されたヒラニヤパティ川だけは、日本のような清流でホッとしました。

ここから涅槃堂までは約一キロ。お釈迦さまの心に少しでも触れたいと、この道を含んで歩きました。

最後のお姿を刻んだ涅槃像は長さ六メートル。安置する涅槃堂はビルマの仏教徒が造ったものらしく、様式がインド風ではありませんね。

クシナガールのホテルで夕食後、永年の夢だったお釈迦さまの最後のお言葉、『遺教経』を節付きで読みました。長いお経なので少し端折りましたが、それでも夢を叶えることが出来ました。



最後の沐浴地ヒラニヤパティ川



スリランカ、キャラニアからの巡拝団・ケーサリヤ

旅行中、ずっとお世話をしてもらったインドのガイド、シャルマさんのお話です。

四人兄弟の末子で、ご家族は奥さんと子供二人に、八五歳と七八歳のご両親がニューデリーと一緒に住んでいて、奥さんは元々英語の教師だったけれども、父親が高齢になったことを考えて退職したとか。今、ガソリンの値段が一八〇円だそうですが（実勢では日本の約10倍）インドは物価が上がっているのに、奥様がやめたら大変でしょう、といったら「親の面倒を子が見るのは当たり前ですし、喜ばれるのは楽しいですから。」と返っていました。

また、道端で会ったみずぼらしい少年にキャンディをくれたら、やにわに自分の口に放り込んでかみ砕き、抱っこしている妹の口に入れて食べさせていました。先月号の『一切れのパン・幼いマリコに』を因らざる思い出しました。

こんなことを誰もが当たり前前に行ける国って、矢張りインドは真つ当な国だなと感心しました。